車
×
俺

一

俺は車を愛しいる。

全車種、全メーカー、車と名のつくものを分け隔てなくすべて。

そりゃあ、できうる限りコレクションしたいとはいえ、親は資産家ではないし、俺も社長やセレブでなく、平社員。

その身分では、生活費を切りつめても、せいぜい二台所有が限界。

とはいえ、俺はいい時代に生まれてきた。

車のサブスクがあるから、ひんぱんに乗りかえることができるし、販売店に友人がいるから、融通も利かせてもらえる。

ということで、半年に一回くらい、乗りかえて、さまざまな車種や、いろいろなメーカの車を期間内にじっくりと運転して堪能しているわけ。

今、乗っているのは、威容を誇る黒の大型ワゴン。

ハンドルにかかれる独特の重み、アクセルを踏むときに実感する馬力の底しれなさ、エンジンの凄みのある轟き、戦車のような、いかついフォルム、黒光りする頑丈なボディ・・・。

平等に車を愛したいところなれど、この大型ワゴンにすっかり心を奪

われ、購入して俺のものにしようかと思ったのだが。

休みの日、友人と推しの大型ワゴンで山にトライブ。
駐車場に愛車を停めて、山の散策道を歩いていたところ。

途中でロープが行く手を阻み「立ち入り禁止」の看板。
踵を返そうとしたのを尻目に「いやいや、爽やかな木漏れ日の道がつづいているじゃん」と友人はロープを跨ぎ、前進。

「おいおい」と止めようとしたものを、しばし歩いても「立ち入り禁止」の理由となるような危険物を見かけなかったので「まあいいか」と友人と肩を並べ歓談。

友人も車好きとあって、話は大盛りあがり。

すこし調子をこいて「いやあ、俺は車を抱けちゃうね」と肩をすくめてみたり。

「まさか、おまえ車でヌいているんじゃないんだろうな？」

「ノーコメント」「おいおい」と笑いあっていたら、ふと横道が目にはいった。

横道のほうを見やれば、そこは森が開けた土地。
家でも建っているのかと思いきや、目にしたのは、黒焦げの破片の山。

「あれ、火事があったのか？」と呟くと「ん？ほんとだ」と友人も足を止めて曰く。

「でも、このごろ火事があったなんて聞いていないぞ。俺の実家、ここらへんに近いからさ、もし火事があったなら、すぐに電話してくるだろうし」

「じゃあ、長い間、放っておかれているってことか？建物と土地の所有者はどうしたんだ？」

「身寄りのない家主が、火事で亡くなったのかもな。そういう場合、行政も手がでなくて、焼跡をのこしたまま、放っておかれるって聞いたことあるし」

なるほどと思いつつ、土地を見回す。

家は全焼したらしいものの、あたりの木には燃え移らなかったよう。

すこし離れたところにある車庫も、黒ずみながら、倒壊はしていなく。

どうにも車庫が気になり、こんどは俺が率先してロープを超えて敷地内へ。

「ちょ、待てよ」と友人があとにつづくのに、ふりかえらず、車庫へとまっしぐら。

シャッターの窪みに指をいれて力をこめれば、果たして開いて、お目見えしたのは・・・。

軽自動車の真っ赤なスポーツカーだ。

どうにか喘ぐのを飲んで「い、いいから！お礼とか！きみを助けられただけで光栄だから！」と訴えるも、もっと強く早く巨根をこすりつけられ、あんあん股間をぐちゅぐちゅ。

「どうして？ぼくに乗っていたとき、褒めていたのは嘘なの？
メカが凝縮されて、車体がコンパクトだから、エンジンの音と振動がお尻にダイレクトに伝わってくるのが、たまらないって」

俺の頬を舐めて「ほら、もっと、ダイレクトにぼくに乗ってみたくない？」と涙目で囁かれて、心がぐらついて。
が、「あ、くう、だ、めだ！子供に、こんな・・・！」と抵抗。
といって、口だけで「ごめんね、ご主人さま」と無力にもパンツをずらされる。

「は、はあ・・・ぼく、も、ガマンできないのお・・」
お願い、ぼくに乗って、いっぱいぼくのエンジンの情熱を受けとめて」

尻の奥に押し当てらる固いもの。
ぎくりとしたとはいえ、尻の奥にすんなり侵入してきたのは、巨根でもなければ指でもなさそう。

「あ、うそ、なに、これ、あう、ああ、や、やあ、だめえ、そん、な、かき、回さ、な、でえ・・・!」